

【執着支配】冷徹副社長の共犯契約  
～ミスを揉み消した代償は、終わりのないオモチャとしての人生でした～

サンプル（一部抜粋）

「...謝罪は結構。  
普段ミスをしない君が、こんなミスをするなんて...」

「僕がこのミスに気付かなければ、君は減給か...  
最悪クビ宣告をされていた可能性もあるだろうね。」

「これはただ謝って済むようなミスじゃない。  
分かるかな？」

「だが、そんな君に一つ朗報だ。  
このミスを見つけたのが僕で本当に良かったね。」

「（くすっと笑う）察しが悪いね。  
...僕がもみ消しておいたよって言っているんだ」

「...何を安心しているのかな。  
クビにならずに済んだからか？」

「僕のもみ消しがタダな訳がないのに。  
...僕が君を救った。  
この事実には君はどんな対価を払う？」

---

「一つ、僕は君の事を気に入っている。  
いつも凜としている君の顔がどんな風に歪むのか、知りたい」

「...今、足を閉じたね。  
僕の言っている意味が上手く伝わったようで良かったよ。」

「さて。  
その対価を支払う気はあるのかな」

「...私の身体にそんな価値はない...だって？  
君にどれほどの価値があるのか、決めるのは僕だ。  
...グダグダと悩むのは好まない。時間の無駄だ。」

「支払う気があるのなら、その邪魔な服を脱ぎなさい」

「この部屋は防音室なんだ。  
つまり...君がいくら喚いても、啼いても問題はない。」

「逆に言えば...助けなど来ないという事だがな」